

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 －2018年（平成30年）－

馬見塚理奈 保田和里¹⁾
三浦美穂¹⁾ 吉野修司¹⁾ 杉本貴之¹⁾ 有島 勉²⁾

Summary of the 2018 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Rina MAMIZUKA, Asato YASUDA,
Miho MIURA, Shuji YOSHINO, Takayuki SUGIMOTO, Tsutomu ARISHIMA

要旨

2018年に県内では全数把握対象87疾患中、26疾患が報告された。疾患別では百日咳（318例）、結核（162例）、つつが虫病（60例）の報告が多かった。全国的に報告数の増加がみられたA型肝炎は県内でも同様に増加し、全数把握対象疾患となった2003年以降最も多い報告数である。また、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は県内で12例報告があり、全国で最も報告数が多かった。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年及び例年の約0.9倍、全国の約1.6倍であった。眼科定点対象疾患の報告総数は、前年の約1.2倍、例年の約1.1倍、全国の約3.4倍であった。基幹定点対象疾患の報告総数は、前年の約1.1倍、例年の約0.9倍、全国の約1.1倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年及び例年の約0.8倍、全国の約0.5倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年の約0.8倍、例年の約0.7倍、全国の約0.8倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994年（平成6年）から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における2018年（平成30年）の患者発生状況をまとめたので報告する。

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた115疾患を調査対象

企画管理課 ¹⁾ 微生物部 ²⁾ 現 県立宮崎病院

とした。

指定届出医療機関（以下「定点」という。）は、感染症発生動向調査事業実施要綱¹⁾に基づき選定した（表1）。

表1 保健所別指定届出医療機関（定点数）

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16(15)	10(9)	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59(58)	36(35)	6	7	13

* インフルエンザ及び小児科定点数は21～48週は合計58及び35となった。

2 調査期間

全数把握対象疾患については2018年1月1日から12月31日まで、定点把握対象疾患については2018年1週から52週まで、インフルエンザについては2018/2019年シーズンの2018年41週から2019年14週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も診断日をもとに集計した。

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

結核162例が報告された。

a) 結核 Tuberculosis

報告数は162例で、前年(189例)の約0.9倍であった。病型は、肺結核が72例、その他の結核(結核性胸膜炎、結核性リンパ節炎、腸結核)が21例、肺結核及びその他の結核(結核性胸膜炎、粟粒結核、腸結核)が3例、疑似症患者が3例並びに無症状病原体保有者が63例であった。宮崎市(86例)、都城(33例)、延岡(13例)保健所からの報告が多く、性別では男性が80例、女性が82例であった。年齢別では70歳以上が85例と全体の約半数を占めた。

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症39例が報告された。

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic Escherichia coli infection

報告数は39例で、前年(17例)の約2.3倍であった。患者が28例(うちHUS発症:1例(O157))、無症状病原体保有者が11例であった。O血清型別では、O26が22例、O157が7例、O91が4例、O103、O111、O121及びO145が各1例、不明が2例であった(表2)。都城(27例)、宮崎市(8例)、日向(2例)、日南及び中央(各1例)保健所からの報告であった。

年齢別では1~4歳が18例と多かった。

発生月別では、6~8月が全体の約7割を占めた。

表2 O血清型別報告数

O血清型	報告数
O26	22
O157	7
O91	4
O103, O111, O121, O145	各1
不明	2
計	39

4) 四類感染症

E型肝炎3例、A型肝炎22例、重症熱性血小板減少症候群(SFTS)12例、つつが虫病60例、デング熱1例、日本紅斑熱19例、レジオネラ症7例及びレプトスピラ症2例が報告された。

a) E型肝炎 Hepatitis E

報告数は3例で、日向(2例)、宮崎市(1例)保健所からの報告であった。年齢別では50歳代が2例、60歳代が1例で、主な症状として発熱、全身倦怠感、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。

b) A型肝炎 Hepatitis A

報告数は22例で、宮崎市(16例)、都城及び日向(各2例)、延岡及び日南(各1例)保健所からの報告であった。年齢別では20歳代が8例と多く、次いで50歳代及び60歳代が各4例、10歳代及び30歳代が各3例であった。主な症状として全身倦怠感、発熱、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。遺伝子型はIA型が12例、不明が10例であった。確定感染経路は経口感染が1例、推定感染経路は経口感染が18例、不明が3例であった。

c) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS (severe fever with

thrombocytopenia syndrome)

報告数は12例で、宮崎市(8例)、延岡及び日南(各2例)保健所からの報告であった。性別は男性が6例、女性が6例、年齢別では60歳代以上が全体の約8割を占めた。主な症状として発熱、食欲不振、全身倦怠感、白血球・血小板減少等がみられた。患者の発症時期は、3~12月で特に5月が多かった。

d) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は60例で前年(33例)の約1.8倍と増加した。患者発生時期は例年どおり冬季で、ほぼ11月(38例)、12月(19例)の報告が占めた。都城(27例)、宮崎市(11例)保健所からの報告が多く、性別は男性が37例、女性が23例、年齢別では60歳以上が約8割を占めた。主な症状として頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹等がみられた。

e) デング熱 Dengue fever

報告数は1例で、都城保健所からの報告であった。患者はフィリピンへの渡航歴があり、性別は男性、年齢は10歳代であった。主な症状として2日以上続く発熱、頭痛、発疹がみられた。

f) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は19例で、患者の発生時期は5月から12月であった。宮崎市(10例)、日南(8例)、高鍋(1例)保健所からの報告であった。性別は男性が13例、女性が6例、年齢別では70歳代が8例と多く、次いで60歳代及び80歳代が各5例、40歳代が1例であった。主な症状として発熱、頭痛、刺し口、発疹、肝機能異常等がみられた。

g) レジオネラ症 Legionellosis

報告数は7例で、宮崎市(3例)、都城(2例)、日南及び小林(各1例)保健所からの報告であった。病型はいずれも肺炎型であった。性別は男性が6例、女性が1例で、年齢別では40歳代が1例、60歳代及び80歳代が各3例であった。主な症状として発熱、咳嗽、呼吸困難、意識障害、肺炎等がみられた。

h) レプトスピラ症 Leptospirosis

報告数は2例で、宮崎市及び日南(各1例)保健所からの報告であった。いずれも男性で、20歳代及び70歳代であった。主な症状として発熱、結膜充血、筋肉痛、たんぱく尿、腎不全がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢2例、ウイルス性肝炎7例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症14例、急性弛緩性麻痺5例、急性脳炎7例、クロイツフェル

ト・ヤコブ病2例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症4例、後天性免疫不全症候群7例、侵襲性インフルエンザ菌感染症3例、侵襲性肺炎球菌感染症24例、水痘(入院例)2例、梅毒10例、播種性クリプトコックス症5例、破傷風4例、百日咳318例及びび風しん3例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は2例で、病型はいずれも腸管アメーバ症で、宮崎市保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢別では40歳代及び50歳代であった。主な症状として腹痛、大腸粘膜異常所見がみられた。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は7例で、原因病原体はB型肝炎ウイルスが6例、C型肝炎ウイルスが1例で、宮崎市(6例)、延岡(1例)保健所からの報告であった。性別は男性が6例、女性が1例で、年齢別では40歳代及び50歳代が各2例、20歳代、30歳代及び60歳代が各1例であった。主な症状として全身倦怠感、肝機能異常、黄疸、褐色尿、発熱等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

Carbapenem-Resistant *Enterobacteriaceae*

報告数は14例であった。原因病原体は *Enterobacter aerogenes* が5例、 *Enterobacter cloacae* が5例、 *Escherichia coli* が2例、 *Serratia marcescens* 及び *Proteus mirabilis* が各1例で、宮崎市(9例)、延岡(3例)、都城(2例)保健所からの報告であった。年齢別では80歳代が5例と多く、次いで60歳代及び70歳代が3例、50歳代が2例、90歳代が1例で、主な症状は尿路感染症、肺炎、菌血症、敗血症、胆嚢炎等がみられた。

d) 急性弛緩性麻痺 Acute flaccid paralysis

報告数は5例で、推定される原因病原体はライノウイルスが3例、エンテロウイルス68型及び不明が各1例であった。いずれも宮崎市保健所からの報告であった。年齢別では0~4歳が3例、10歳代が2例であった。主な症状として弛緩性麻痺(左右上肢、左右下肢、呼吸筋、顔面)、深部腱反射低下、筋萎縮、発熱、髄液細胞数増加等がみられた。

e) 急性脳炎 Acute encephalitis

報告数は8例で、原因病原体はインフルエンザウイルスB型が4例と多く、次いでヘルペスウイルスが3例、インフルエンザウイルスA型が1例であった。宮崎市(7例)、日向(1例)保健所からの報告であった。年齢別では0~4歳が4例、70歳代が2例、5~9歳及び80歳代が各1例であった。主な症状として発熱、嘔吐、痙攣、項部硬直、意識障害等がみられた。

f) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は2例で、病型はいずれも古典型クロイツフェルト・ヤコブ病で、宮崎市及び都城(各1例)保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢別では60歳代及び80歳代であった。主な症状として進行性認知症、ミオクローヌス、錐体路症状、無動性無言状態、精神・知能障害等がみられた。

g) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infections

報告数は4例で、血清群はA群及びG群が各2例で、いずれも宮崎市保健所からの報告であった。年齢別では60歳代が3例、70歳代が1例であった。主な症状としてショック、腎不全、DIC、中枢神経症状、軟部組織炎等がみられた。

h) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は7例であった。病型はAIDSが3例(指標疾患:ニューモシスティス肺炎が2例、カンジダ症、サイトメガロウイルス感染症及びニューモシスティス肺炎が1例)、無症候性キャリアが2例、その他(感染初期、多発性・難治性皮下膿瘍)が各1例であった。宮崎市(5例)、都城(2例)保健所からの報告で、性別は男性が6例、女性が1例であった。年齢別では20歳代及び40歳代が各2例、30歳代が3例で、感染経路は異性間性的接触1例、同性間性的接触4例、不明2例であった。

i) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive *Haemophilus influenzae* infection

報告数は3例で、いずれも宮崎市保健所からの報告で、患者は0~4歳、70歳代及び80歳代が

各1例であった。主な症状として発熱、肺炎、意識障害、ショック、菌血症がみられた。

j) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal infection

報告数は24例で、宮崎市(16例)、都城(4例)、延岡(2例)、小林及び日向(各1例)保健所からの報告であった。性別は男性が8例、女性が16例で、年齢別では60歳代以上が全体の約8割を占めた。主な症状として発熱、全身倦怠感、意識障害、肺炎、菌血症等がみられた。ワクチン接種歴は接種無しが12例、有りが3例、不明が9例であった。

k) 水痘(入院例) Chickenpox

報告数は2例で、病型はいずれも検査診断例であった。宮崎市及び都城(各1例)保健所からの報告で、年齢別では40歳代及び50歳代であった。主な症状として発熱、発疹、肝炎がみられた。ワクチン接種歴は接種無し及び不明であった。

l) 梅毒 Syphilis

報告数は10例で、病型は早期顕症I期が3例、早期顕症II期が7例であった。宮崎市(4例)、延岡(3例)、都城、小林及び日向(各1例)保健所からの報告であった。性別は男性が6例、女性が4例、年齢別では50歳代が3例、20歳代及び30歳代が各2例、10歳代、40歳代、70歳代が各1例であった。感染経路は異性間性的接触が7例、性的接触(異性間・同性間不明)が3例であった。主な症状として初期硬結、鼠径部リンパ節腫脹(無痛性)、硬性下疳、梅毒性バラ疹、右顎部潰瘍がみられた。

m) 播種性クリプトコックス症

Disseminated cryptococcosis disease

報告数は5例で、宮崎市(3例)、都城及び延岡(各1例)保健所からの報告であった。年齢別では70歳代及び80歳代が各2例、30歳代が1例で、主な症状として頭痛、発熱、意識障害、真菌血症、項部硬直等がみられた。

n) 破傷風 Tetanus

報告数は4例で、宮崎市、延岡、小林及び高鍋(各1例)保健所からの報告であった。年齢別では50歳代、60歳代、70歳代及び80歳代であった。主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、

嚥下障害, 発語障害, 呼吸困難 (痙攣性) 等がみられた。

o) 百日咳 Pertussis

報告数は 318 例, 日南 (106 例), 高鍋 (97 例), 宮崎市 (49 例) 保健所からの報告が多く, 性別は男性が 146 例, 女性が 172 例, 年齢別では 10~14 歳が約半数を占めた。ワクチンの接種歴は有りが 236 例, 無しが 27 例, 不明が 55 例であった。主な症状として持続する咳、夜間の咳き込み、呼吸苦、スタックート、ウーブ等がみられた。

p) 風しん Rubella

報告数は 3 例で, 病型はいずれも検査診断例で, 宮崎市 (2 例), 高鍋 (1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 1 例, 女性が 2 例, 年齢別では 20 歳代 1 例, 50 歳代 2 例であった。ワクチン接種歴はいずれも不明であった。主な症状として発熱, 結膜充血, 発疹, リンパ節腫脹, 関節痛・関節炎等がみられた。

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は 55,514 人, 定点当たりの報告数は 1362.7, 前年及び過去 5 年間の平均値 (以下, 「例年」という。) の約 0.9 倍, 全国の約 1.6 倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表 3, 経時的発生状況は図 1 のとおりで, その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2018/2019 年シーズンの報告総数は 18,543 人, 定点当たりの報告数は 319.0 で, 前シーズンの約 0.6 倍, 例年の約 0.8 倍, 全国の約 1.1 倍であった。流行の時期は例年と同程度で, 2019 年第 1 週 (1 月上旬) に定点あたり 13.6 と流行注意報レベルを超過し, 翌第 2 週 (1 月上旬) には定点あたり 44.4 と流行警報レベル開始基準値を超過した。第 4 週 (1 月下旬) で定点あたり 55.3 と流行のピークを迎えた後, 第 9 週 (2 月下旬) に終息基準値を下回った。今シーズンの流行の中心となったウイルスは A 香港型 (AH3) で, AH1pdm09 型及び B 型による患者も確認された。都城 (393.6), 高千穂 (383.0), 延岡 (372.3) 保健所の順に報告が多く, 10 歳未満が全体の約半数を占めた。

b) RS ウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 2,606 人, 定点当たりの報告数は 73.9 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 1.2 倍, 全国の約 1.9 倍であった。延岡 (96.3), 日向 (82.3), 日南 (81.0) 保健所からの報告が多く, 1 歳が全体の 40% を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 1,403 人, 定点当たりの報告数は 39.6 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 0.8 倍, 全国の約 1.7 倍であった。延岡 (75.0), 日南 (64.7), 高鍋 (49.5) 保健所からの報告が多く, 1 歳から 2 歳が全体の 48% を占めた。

d) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 3,920 人, 定点当たりの報告数は 110.6 で, 前年と同程度, 例年の約 1.1 倍, 全国と同程度であった。中央 (302.0), 延岡 (209.8), 宮崎市 (106.4) 保健所からの報告が多く, 4 歳から 6 歳が全体の 43% を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 18,551 人, 定点当たりの報告数は 522.6 で, 前年の約 1.1 倍, 例年と同程度, 全国の約 1.9 倍であった。小林 (1009.3), 日南 (895.0), 中央 (686.0) 保健所からの報告が多く, 1 歳から 3 歳が全体の 40% を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は 760 人, 定点当たりの報告数は 21.5 で, 前年の約 0.8 倍, 例年の約 0.4 倍, 全国の約 1.2 倍であった。小林 (31.0), 延岡 (26.5), 高鍋 (23.5) 保健所からの報告が多く, 1 歳から 7 歳が全体の 71% を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 5,643 人, 定点当たりの報告数は 159.9 で, 前年と同程度, 例年の約 1.4 倍, 全国の約 4.1 倍であった。流行の時期は例年より早く, 第 17 週 (4 月下旬) に定点あたり 5.2 と流行警報レベル開始基準値を超過し, 第 26 週 (6 月下旬) で定点あたり 11.0 と流行のピークを迎えた後, 第 33 週 (8 月下旬) に終息基準値を下回った。延岡 (218.8), 日向 (214.0), 日南 (211.3) 保健所からの報告が多く, 1 歳から 2 歳が全体の 55% を占

めた。

h) 伝染性紅斑 *Erythema infectiosum*

報告総数は 166 人，定点当たりの報告数は 4.7 で，前年の約 0.5 倍，例年及び全国の約 0.3 倍であった。宮崎市及び日南（各 10.3）保健所からの報告が多く，4 歳から 6 歳が全体の 39% を占めた。

i) 突発性発しん *Exanthem subitum*

報告総数は 1,564 人，定点当たりの報告数は 44.1 で，前年と同程度，例年の約 0.9 倍，全国の約 2.0 倍であった。延岡（60.3），宮崎市（51.4），日南（50.7）保健所からの報告が多く，6 ヶ月から 1 歳が全体の 90% を占めた。

j) ヘルパンギーナ *Herpangina*

報告総数は 1,115 人，定点当たりの報告数は 31.8 で，前年の約 0.5 倍，例年の約 0.6 倍，全国と同程度であった。延岡（101.3），日南（44.3），日向（33.5）保健所からの報告が多く，1 歳から 2 歳が全体の 61% を占めた。

k) 流行性耳下腺炎 *Mumps*

報告総数は 1,243 人，定点当たりの報告数は 35.0 で，前年の約 1.9 倍，例年の約 0.9 倍，全国の約 4.7 倍であった。日南（348.3）保健所からの報告が多く，4 歳から 6 歳が全体の 44% を占めた。

2) 眼科及び基幹定点対象疾患

眼科定点対象疾患の報告総数は 913 人，定点当たりの報告数は 152.1 で，前年の約 1.2 倍，例年の約 1.1 倍，全国の約 3.4 倍であった。

基幹定点対象疾患の報告総数は 164 人，定点当たりの報告数は 23.4 で，前年の約 1.1 倍，例年の約 0.9 倍，全国の約 1.1 倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は 1 人，定点当たりの報告数は 0.17 であった。前年，例年及び全国の約 0.2 倍であった。年齢は 20 歳代であった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 912 人，定点当たりの報告数は 152.0 で，前年の約 1.2 倍，例年の約 1.1 倍，全国の約 3.5 倍であった。年齢別では 1 歳から 4 歳及び 30 歳代が各 19% を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 *Bacterial meningitis*

報告総数は 3 人，定点当たりの報告数は 0.43 で，前年の 3.0 倍，例年の 1.5 倍，全国の約 0.4 倍であった。年齢は 0~4 歳が 2 人，5~9 歳が 1 人で，原因菌は *Streptococcus agalactiae* が 1 人，不明が 2 人であった。

d) 無菌性髄膜炎 *Aseptic meningitis*

報告はなかった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasmal pneumonia

報告総数は 5 人，定点当たりの報告数は 0.71 で，前年の約 0.2 倍，例年及び全国の約 0.1 倍であった。5~9 歳，10 歳代，20 歳代，30 歳代及び 70 歳代が各 1 例であった。

f) クラミジア肺炎 *Chlamydial pneumonia*

報告はなかった。

g) 感染性胃腸炎（ロタウイルスに限る）

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告総数は 156 人，定点当たりの報告数は 22.3 で，前年の約 1.3 倍，例年の約 2.2 倍，全国の約 3.3 倍であった。日向（114.0）保健所からの報告が多く，1 歳から 2 歳が全体の 49% を占めた。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 343 人，定点当たりの報告数は 26.4 で，前年及び例年の約 0.8 倍，全国の約 0.5 倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 199 人，定点当たりの報告数は 28.4 で，前年の約 0.8 倍，例年の約 0.7 倍，全国の約 0.8 倍であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は 234 人，定点当たりの報告数は 18.0 で，前年及び例年の約 0.9 倍，全国の約 0.7 倍であった。都城（29.5），宮崎市（21.3），延岡（20.5）保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 4 割，女性が約 6 割で，年齢別では 20 歳代が全体の 48% を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

報告総数は 58 人，定点当たりの報告数は 4.5

で、前年と同程度、例年の約 1.2 倍、全国の約 0.5 倍であった。高鍋 (8.5)、日向 (8.0)、宮崎市 (5.5) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 1 割、女性が約 9 割で、年齢別では 20 歳代から 40 歳代が全体の 76% を占めた。

c) 尖圭コンジローマ *Condyloma acuminatum*
報告総数は 11 人、定点当たりの報告数は 0.85 で、前年の約 0.4 倍、例年の約 0.5 倍、全国の約 0.2 倍であった。宮崎市 (1.8)、延岡及び高鍋 (各 1.0) 保健所からの報告であった。男女比は約 1 : 1 で、30 歳代が全体の 55% を占めた。

d) 淋菌感染症 *Gonorrhoea*
報告総数は 40 人、定点当たりの報告数は 3.1 で、前年の約 0.6 倍、例年の約 0.5 倍、全国の約 0.4 倍であった。都城 (10.0)、日南 (5.0)、高鍋 (4.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 8 割、女性が約 2 割で、20 歳代が全体の 55% を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症
Methicillin-resistant Staphylococcus aureus
infection

報告総数は 188 人、定点当たりの報告数は 26.9 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 0.7 倍、全国の約 0.8 倍であった。70 歳以上が全体の 60% を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症
Penicillin-resistant Streptococcus
pneumoniae infection

報告総数は 11 人、定点当たりの報告数は 1.6 で、前年の約 2.2 倍、例年の約 1.1 倍、全国の約 0.4 倍であった。60 歳代が全体の 45% を占めた。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症
Multidrug-resistant Pseudomonas
aeruginosa infection

報告はなかった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち、結核は 2014 年以降やや減少傾向である。県内全域から、0 歳から 101 歳まで幅広い年齢層で報告され、特に 70 歳以上の高齢者が全体の約半数を占め、例年どおりの傾向であった。A 型肝炎、日本紅斑熱、カルバペネ

ム耐性腸内細菌科細菌感染症及び侵襲性肺炎球菌感染症はいずれも過去最多の報告数である。また、重症熱性血小板減少症候群は 3 年連続全国最多であった。百日咳は 2018 年 1 月より定点把握対象疾患から全数把握対象疾患となった。2018 年 11 月末時点での都道府県別患者発生状況を見ると、人口 10 万人あたりの患者報告数は香川県 (47 人) について、宮崎県 (25 人) と全国で 2 番目に多かった。²⁾ 全数把握対象疾患となり、より正確に当県の発生状況を確認できるようになったため、今後も冷静に状況を注視する必要がある。

定点対象疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は、前年及び例年の約 0.9 倍、全国の約 1.6 倍であった。また手足口病は前年と同程度であったが、例年及び全国と比べ多く、昨年に続き流行の年となった。

眼科定点対象疾患のうち、そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は、前年の約 1.2 倍、例年の約 1.1 倍、全国の約 3.5 倍と多く、例年通りの傾向であった。

基幹定点対象疾患の報告数は前年の約 1.1 倍、例年の約 0.9 倍、全国の約 1.1 倍であったが、対象疾患のうち感染性胃腸炎 (ロタウイルス) は前年、例年及び全国に比べ多く、年々増加傾向である。

月報告対象疾患の性感染症の報告数は前年及び例年の約 0.8 倍、全国の約 0.5 倍であった。いずれの疾患も 20~30 歳代に多く認められた。また薬剤耐性菌感染症は前年の約 0.8 倍、例年の約 0.7 倍、全国の約 0.8 倍であった。

本調査結果から、疾患によって流行発生時期や地域差、年齢差等があることが分かった。今後も引き続き、感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い、感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに、幅広い世代に適切な情報の提供と感染予防の啓発を行っていく必要があると考えられる。

備考)

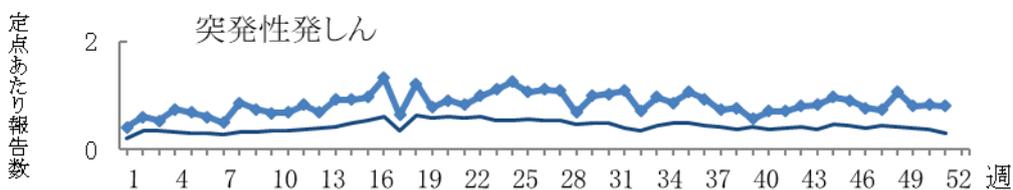
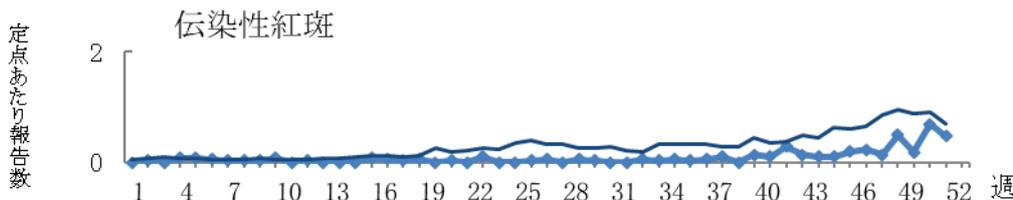
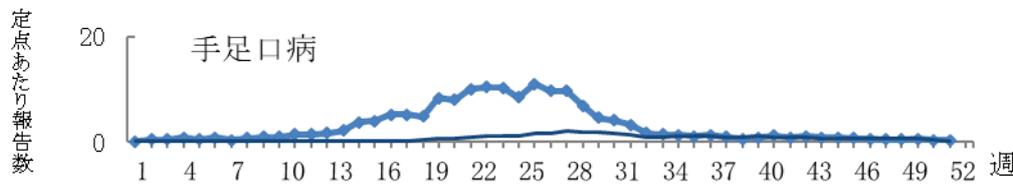
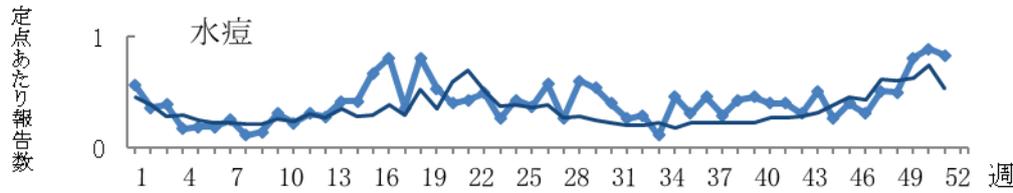
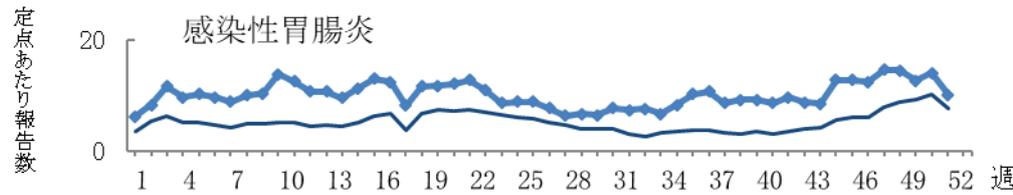
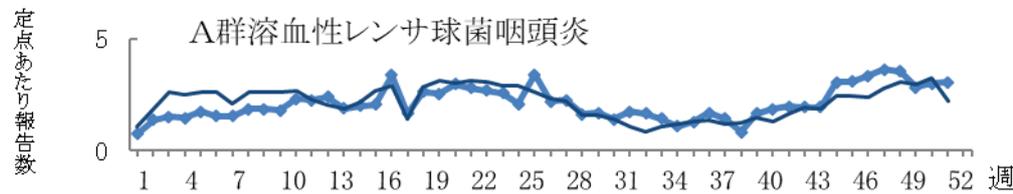
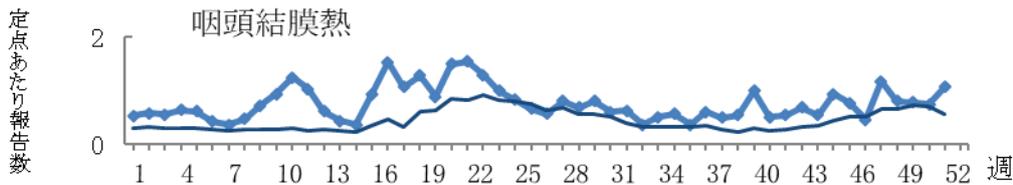
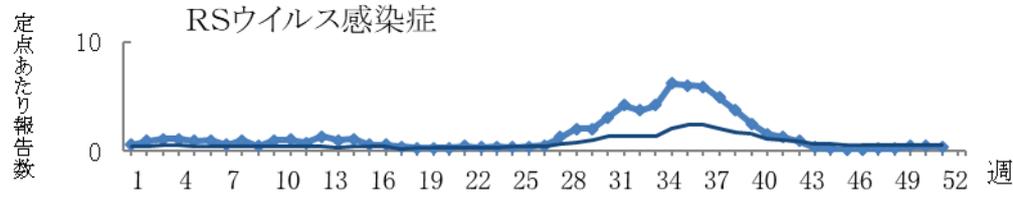
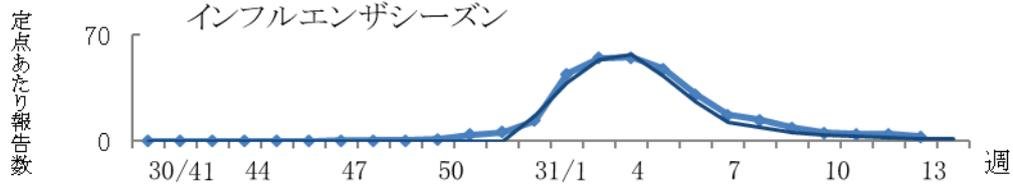
感染症発生動向調査事業は、患者情報と病原体情報から構成されており、当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生省保健医療局長通知：感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について，平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号.
- 2) 国立感染症研究所：〈特集〉百日咳 2018 年 11 月現在，病原体検出情報 IASR2019 年 1 月，Vol.40 No1(No.467)，1，(2019)

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2018年）

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2017年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2018年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザシーズン	18,543	319.0	10歳未満	51	57	76	105
RSウイルス感染症	2,606	73.9	1歳	40	109	119	193
咽頭結膜熱	1,403	39.6	1歳～2歳	48	74	82	169
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	3,920	110.6	4歳～6歳	43	102	107	97
感染性胃腸炎	18,551	522.6	1歳～3歳	40	114	100	194
水痘	760	21.5	1歳～7歳	71	80	38	122
手足口病	5,643	159.9	1歳～2歳	55	101	136	411
伝染性紅斑	166	4.7	4歳～6歳	39	52	31	30
突発性発しん	1,564	44.1	6ヶ月～1歳	90	103	90	196
ヘルパンギーナ	1,115	31.8	1歳～2歳	61	51	61	101
流行性耳下腺炎	1,243	35.0	4歳～6歳	44	189	90	466
急性出血性結膜炎	1	0.2	20歳代	100	19	22	21
流行性角結膜炎	912	152.0	1歳～4歳, 30歳代	各19	124	108	345
細菌性髄膜炎	3	0.4	10歳未満	100	300	150	40
無菌性髄膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
マイコプラズマ肺炎	5	0.7	5～9歳, 10歳代～30歳代, 70歳代	100	16	6	6
クラミジア肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)	156	22.3	1歳～2歳	49	134	217	330
性器クラミジア感染症	234	18.0	20歳代	48	89	89	70
性器 ヘルペスウイルス感染症	58	4.5	20歳代～40歳代	76	97	116	48
尖圭コンジローマ	11	0.9	30歳代	55	39	46	15
淋菌感染症	40	3.1	20歳代	55	58	49	37
メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	188	26.9	70歳以上	60	77	71	79
ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	11	1.6	60歳代	45	220	108	40
薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.0	—	—	0	0	0



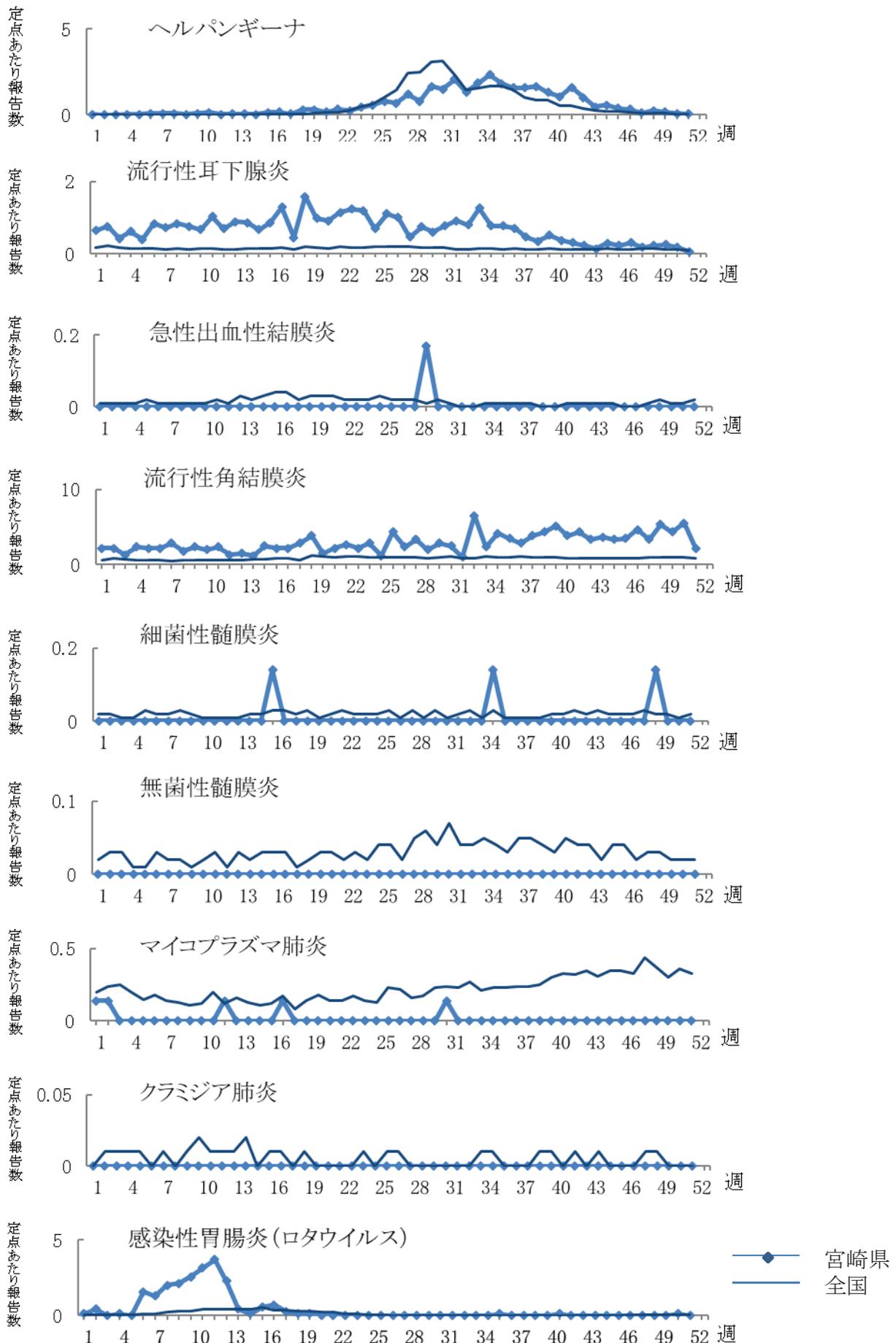


図1 定点把握対象疾患(週報告対象)の定点あたり報告数の週推移(経時発生状況)